

嫉妬する登場人物たち

—ジョルジュ・サンドの作品より—

吉 田 綾

はじめに

古今東西、登場人物の「嫉妬」という感情は、物語の進行に起伏を与える重要な要素だった。例えばフランス文学では、13世紀の『薔薇物語』が恋愛成就¹⁾を妨げる障害として、「羞恥」や「欺瞞」とともに「嫉妬」をアレゴリーとして登場させているし、19世紀にはバルザックが『従妹ベット』(1847)において、面倒をみていた「恋人」を奪われ、復讐に執念を燃やすオールドミスの嫉妬を描いた。恋多きカルメンに翻弄されるドン・ホセの嫉妬²⁾、年の離れた愛人が若い娘と結婚しても、平静を取りつくろおうとするレアの誇り高い嫉妬など³⁾、登場人物が嫉妬にとりつかれる作品は枚挙にいとまがない。人間を美化せずその心理の暗部をも赤裸々に描写しようとするれば、嫉妬はますます文学の不可欠な要素となる。

バルザックは『人間喜劇』と称して、さまざまなタイプの人間の情熱を描き分けたが、彼と同時代の女性作家ジョルジュ・サンド George SAND (1804～1876) も、ロマン派の小説家らしく情熱と恋愛を多産な作家生活のなかで謳いあげた。彼女の作品は概して、作者自身と共通点をもつ主人公に「肩入れ」する傾向があり、心情的にマイナスイメージの性質は、成功や幸福をはばむ世間や適役に割り当てられることが多い。だが、いくつかの作品のなかには、その

ように単純ではない役割をもつ嫉妬が存在する。出世作となった『アンディアナ』 *Indiana*、日本でも読み続けられる『愛の妖精』 *La Petite Fadette*、作家の代名詞とみなされる『レリア』 *Lélia* である。小論では三作品に登場する人物たちの嫉妬を検証し、この性格設定が物語の展開をどのように方向付けているかを考えたい。

1 『アンディアナ』にみられる愛憎劇

まず、石橋美恵子が19世紀的な意味で「メロドラマ性」に富んでいると指摘する⁴⁾『アンディアナ』に描かれた嫉妬をみてみよう。1832年、初めてジョルジュ・サンドのペンネームで発表され、バルザックも絶賛した作品である。次々と起こる事件が読者の興味を持続させ、ヒロインの恋のゆくえに一喜一憂させる。

19歳のアンディアナは、三年前に40歳年上の退役軍人デルマール大佐と愛のない結婚をさせられ、粗野で横暴な夫の所有物として抑圧された生活を送っている。専制的な父に育てられたアンディアナは、結婚によって父から夫へと主人をかえただけの奴隷で、父の家という牢獄と結婚生活の孤独を交換しただけだった。

ヒロインの不幸を際立たせるために夫の欠点が並べ立てられ、特に嫉妬深い性格はあらゆる場面で強調される。

召使のもとに忍んできた若い貴族のレイモンを、デルマールが泥棒と誤って銃で負傷させたとき、彼を熱心に介抱する妻の態度を不愉快に感じる。そして後日、「年を取った嫉妬深い夫にありがちなおどけた調子で」冗談めかして、次のように切り出す。

今日はよく働いていい子にしていたから、あなたが喜ぶことを言ってあげよう。(省略) あなたの憂さ晴らしをするために、明日のお昼にあなた

の崇拜者の一人を招待したよ。誰でしょうって聞くだらうね。⁵⁾

こうもったいぶったあと、レイモンの名を聞かされて動揺する妻を針で刺すようにいたぶるのだ。

あなたにならって、寛大になろうと思ってな。伯母さんのところに、あの男があなたを訪ねて行ったとき、やけに親切に歓迎してやったそうだから。⁶⁾

そして、青ざめて反論するアンディアナをますます陰湿に追い込んでゆく。

女は皆、嘘つきでずるいが、そうやって楽しんでいるんだな！舞踏会の間あの男とずっと一緒に踊ったそうじゃないか。⁷⁾

妻に関する情報をできるかぎり集めておきながら、誘導尋問していくのである。しかし、当初の恋人を捨てて自殺に追いつめたブレイボーイは、今度はアンディアナを誘惑することになるのだから、夫の嫉妬も結果的には当然かもしれない。物語後半では、不器用だが彼なりにアンディアナを愛していて、妻に受け入れられない不憫な夫として読者の同情を誘う。

アンディアナは、夫が不用意に発した命令を検討もせずに実行する。犁をひく馬のように無関心で。自分の考えが誤解され、意志が無視された結果を見てデルマールは憤慨する。しかしアンディアナから氷のように冷静な言葉で、夫の命令に従ったまでだと証明されると、彼は怒りを自分自身に向けざるをえない。それは自尊心が強く感情の激しい小人にとって、残酷な苦痛であり侮辱だった。

もし彼がスミルナかカイロにいるのだったら妻を殺しただらう。とはい

え、心の底では彼の支配下で弱々しく生きている妻を、彼の過ちを注意深く秘密にしてくれるこの妻を彼は愛していた。愛していたのか哀れんでいたのか分からないが、ともかく彼は妻から愛されたか⁸⁾った。

アンディアナのデルマールに対する無関心は、夫の嫉妬よりも残酷である。

さて、アンディアナをめぐって、うわべは極めて冷静を装っているが、その内面に激しい嫉妬の炎を燃やしている人物がいた。フランスの植民地ブルボン島で一緒に育った従兄のラルフである。一見、冷ややかで人を寄せつけない、情熱とは程遠い人物のように描かれる。アンディアナの保護者的存在で家族同然に暮らし、デルマールからも信頼されている。そうでありながら「この世で最も価値を認めていない男」レイモンとも親友としてつきあい、アンディアナとの恋路も見て見ぬふりをする。ヒロインに対する感情的な立場を読者が判断しかねる不可解な人物である。

ところが、ポーカーフェイスを通してきたラルフが、小説終盤になって初めて人間らしい感情を表に出す。アンディアナがレイモンと一緒にいるために家を出たこと、そのアンディアナをレイモンが裏切ったと知るときだ。すべてを犠牲にしようとするアンディアナの熱情は、レイモンの利己的な理性に拒絶されたのだ。

ラルフは最も理性的な男の生涯において、少なくとも一度は起こる激しい興奮状態にあった。狂気寸前の怒りは、もう一步で爆発するところだった。とはいっても、冷静な気質の人間らしく、その怒りは静かに凝縮していた。しかし、高貴な魂の怒りは深刻だった。ラルフにあっては奇跡ともいえる妙な心の状態が、彼の形相を恐ろしく⁹⁾していた。

無感動、無関心は従妹アンディアナへの情熱を隠しておくための仮面だった。嫉妬などとは無縁に思われたラルフが、その実、デルマールの単純であからさ

まな嫉妬とは比べものにならない激しい情念を、レイモンに対して燃やしていたのだ。デルマールに微塵の嫉妬も感じなかったのは、彼を競争相手と見なさなかったからにすぎない。

僕に嫉妬の苦しみを一度も味わわせなかったというだけでも、僕はあの男が好きだったのだ。¹⁰⁾

そして、アンディアナと二人、この世に別れを告げようと決心したとき、これまで秘めてきた愛と苦しみを告白する。

僕の生涯で最も恐ろしい苦しみを語る時がきた。僕があんなに夢見たあなたの愛を他の男が手に入れたのだ。ずっと閉じ込めてきた感情をはっきりと意識したのはあの時だった。僕の胸に憎しみが毒を流し込み、残っている僕の気力を嫉妬が食いつぶした。その時まで、想像の中のあなたは無垢のままだった。尊敬の気持ちからあなたをベールで包み、それを剥ぐことなど思いもよらなかった。しかし、他の男があなたを自分の運命に引き込んでいる、僕の手が届かない所へあなたを奪い去り、僕が夢にみることさえできなかった幸福にゆっくりと酔っている、そう考えると僕は気も狂わんばかりだった。この深淵の底にあの憎い男を引きこみ、石で頭を叩き割ってやりたいと思った。¹¹⁾

ここで作者サンドは、嫉妬という人間の負の感情を、非難すべきものとしてとはとらえていない。非人間的で冷淡な男だと思わせてきた人物を読者の眼前で情熱的な恋人に変身させる小道具として用いたのではないか。嫉妬することで、とらえどころのなかった無味乾燥な人物がとたんに、血の通ったロマン主義的人物に見えてくるからである。さらに、ラルフの嫉妬が低俗な利己主義とは異質であることを、アンディアナへの犠牲と献身が示し、愛情の深さをより強調

する。

しかし、あなたの不幸があまりに大きかったので、僕は自分の不幸を忘れた。あの男を殺そうとは思わなかった。あなたが涙を流すだろうから。

(省略) 僕の心をあの男に遺贈するために自分の命をやってもいいと思っ
¹²⁾
 た。

ラルフの心はずっとアンディアナだけに向けられてきた。そのため、死んだ兄の婚約者と義務的に結婚させられると、情のない夫として非難された。ラルフの真摯な情熱は、多くの恋を楽しみはしても一つの恋のために社会生活を犠牲にすることはないレイモンの偽善的分別と対照的である。

『アンディアナ』では二種類の嫉妬が使われていた。夫デルマールのあからさまで有害な嫉妬と、秘めた情熱を抱いて影のごとく静かにヒロインを見守るラルフの嫉妬である。後者は抑えられた感情だけにその強さがいっそう際立ち、外貌に反する内なる情熱を示す要素となった。

2 『愛の妖精』 — 克服される「嫉妬」

二月革命直後、サンドは農村を舞台に自らが理想とする社会を描いた。『愛の妖精』(1849)では、恵まれない生い立ちの少女ファデットが、周囲の不当な敵意と偏見を乗り越えて愛するランドリーと結ばれる。貧しく嫌われ者だったファデットが、村でも一目おかれる家の息子にふさわしい女性に成長していく物語だが、他にもう一人注目すべき特異な性質の人物が設定されている。ランドリーと双子の兄弟シルヴィネである。

双子は別れると必ずどちらか一方が悲しみのあまり死んでしまう、と言われて心配した両親は、二人の仲がよくなり過ぎないように気を配った。しかし、やきもちを焼いたり、いがみ合わせようとしても無駄で、しだいに自然のなり

ゆきに任せるようになった。

幸か不幸か、年とともに二人はますます仲がよくなっていった。少し物が分かりかけてくると、自分たちはどちらか一方がいない時は、ほかの子供と遊んでも楽しくないと語りあった。そして父親が一人を一日中、自分のそばにおいて、その間、一方は母親といっしょに留守番をさせてみたときなど、二人とも実に悲しそうに蒼ざめて仕事に身が入らない。病気になったのかと思われたほどだった。だから、夕方やと一緒にになると手をつないで、あちこち歩きまわって家には帰りたくなかった。それほど二人は一緒にいるのが嬉しかったし、それに、自分たちにこんな悲しい想いをさせた親たちに対して、少しすねていたのだった。それで家の人たちは、そんなことをもう二度とやってみようとはしな¹³⁾かった。

このように子供時代の二人は何をするにも一緒に、好みも病気になるときも同じという有様だった。しかし、成長するにつれて気質の違いが明らかになっていく。明るく活発なランドリーに対して、病気がちなシルヴィネは内向的で精神的にも弱々しい。そして、近隣のプリッシュ村に奉公に出たランドリーが興味の世界を広げると、弟のすべてを独占しておきたいシルヴィネは病的な嫉妬におちいる。

かわいそうにシルヴィネは、ランドリーの関心をひくものなら、どんな小さなものにでも嫉妬を感じるのだったが、弟が親しくする人間となるとなおさらだった。プリッシュ村の若者と友達になって楽しそうにしているのも我慢がならなかったし、奉公先の娘ソランジュを可愛がって遊んでやったりしているところを見ようものなら、ランドリーが妹のナネットのことを忘れていると責め、そんな汚らしい女の子よりナネットのほうが百倍も可愛くて気立てもいい、などいう。

ところが嫉妬にとりつかれると決して公平にはなれないもので、ランドリーが家へ帰ってきたときには、今度は妹をかまい過ぎるといって責め立てる。ランドリーが妹ばかりに気をつかって、自分に対しては退屈そうで素っ気ない、¹⁴⁾というのだ。

そうはいうものの、15歳の少年はさすがに自分の嫉妬心を恥じ、畑仕事に精を出して気を紛らわそうと努力する。しかし、ランドリーがファデットと結婚するとなると、シルヴィネは再び嫉妬にとりつかれて病気になる。

方々の医者にもみせても下がらない奇妙な熱の病を、ファデットはシルヴィネの手を握り、話をするだけで治してしまった。それ以来、シルヴィネは人が変わったように元気になる。それまで毛嫌いしていたファデットを姉のように慕い、病気も嫉妬も跡形なく消え去った。そして、ファデットとランドリーの婚礼から一ヶ月が過ぎたとき、父親から結婚をすすめられると、これまで全く興味もなかった軍隊に志願し、命知らずの武勇の功によりレジオン・ドヌール勲章を受けるまでになる。

こうしてみると、『愛の妖精』はファデットとランドリーの恋物語であるとともに、シルヴィネが子供っぽい嫉妬を克服して大人へと成長するビルドゥングスロマンとして読むことができる。ここでも作者は嫉妬を悪癖としてのみ糾弾するのではなく、形をかえた情熱だと擁護する。

村の「物知り婆さん」は、ランドリーの結婚話のために命が気づかわれるほど弱ったシルヴィネを、「胸の中に愛情がありすぎる」と分析し、次のように予言した。

あの子は生涯に一人の女しか好きにならないだろうよ。ああ一途に思い込む性分じゃね。¹⁵⁾

かくして、弟の妻に生涯一度の恋をしてしまったシルヴィネは、ランドリー

とファデットの幸福を願って、故郷と家族を離れる決心をしたのだ。

物語の前半ではかなり奇異にうつるシルヴィネの性格づけだが、少年の精神的成長を示すための手法だったといえよう。いくぶん優等生にすぎる健全な農夫ランドリーが後半で影をひそめる一方、シルヴィネの変化が集中して描かれる。

シルヴィネの嫉妬は、生来的な情の深さを示すものだった。容姿にも家庭環境にも恵まれながら、いつも暗く沈んだ様子のシルヴィネに村の娘たちは見向きもしないし、彼女たちに自分から声をかける勇気もない。みずから女嫌いだと思い込んだシルヴィネに年齢相応の活気は感じられない。その生彩のない人物像の裏に情熱が隠れていることを、嫉妬が示唆するのである。ファデットを知ることによって、嫉妬は愛情へと進展するが、この情熱は開花することなく自己犠牲へと移行する。「物知り婆さん」が予言したとおり、ファデット以外の女性にシルヴィネの情熱が向けられることはあるまい。誰よりも激しい情熱は、人知れず静かに燃え続けることになる。

3 『レリア』改訂における「嫉妬」の変化

1833年発表の『レリア』初版は、主人公レリアの冷感症を匂わせる、当時としては大胆な告白場面が反響を呼び、『アンディアナ』や『ヴァランティーヌ¹⁶⁾』により作家の地位を築きつつあったジョルジュ・サンドを良くも悪くも有名なにした。サント・ブーヴ¹⁷⁾のように「時代に共通の精神を見事に描き、真実と詩情にあふれた作品」と文学的価値を認めた批評家もいたが、多くの読者は好奇の目で女性作家をヒロインに重ねた。カトリック勢力や保守的な読者は、有害で破廉恥な猥褻小説だと攻撃した。猥褻といっても、現代の読者にとってはむしろ控えめだと感じられる表現であるが、一部分を引用しておこう。レリアが妹ピュルシェリにかつての恋を語りつつ、社会のあらゆる場面における女性の隷属状態を告発する場面である。

ときには、まどろみの中で禁欲的な知性を骨抜きにする恍惚感にとらえられ、彼とともに薫り高い風に吹かれて天にも昇る心地になったわ。えもいわれぬ喜びの波間にただよい、力の抜けた腕を彼の首にまわし、言葉にならないつぶやきを発しながら彼の腕の中に落ちていったわ。でも、相手が目を覚ますと、私の幸福はそこで終わってしまうの。そばにいるのは、風の中で私を撫でていた天使のような人ではなくて、野獣のように残酷であさましい男なんですもの。私は恐ろしくなって逃げようとするけれど、彼は容赦なく追いかけてきて、気を失い死んだようになった女の上で凶暴な快楽を味わうの。

とうとうある日、私はうんざりして恋愛ときっぱり縁を切ったの。¹⁸⁾

賛否両論を巻き起こした話題作に、作家は三年の歳月をかけて大幅に加筆、修正をほどこした。1839年に出された改訂版『レリア』はしかし、「難渋な宗教小説」と評され売れ行きは伸びなかった。厭世的な美女レリアが、恋い慕う年下の青年詩人を絶望させて自殺に迫いやる一方、自らも、狂気の修道僧に絞殺される、という波乱万丈な初版に比べると、確かに改訂版は哲学的、社会的な色あいが強く、物語としての魅力には欠けるかもしれない。

改訂版では、レリアが隠棲した修道院の院長となり、腐敗した教会組織の改革に身を捧げることになる。当時の読者に受け入れられなかったからといって、作家、思想家として満を持して書かれた改訂版を過小評価してはならないが、それはさておき本章では、改訂にあたって嫉妬という要素がどのように使われたかを検証したい。

宗教、恋愛、社会のすべてに失望した虚無的なレリアを取りまく主な登場人物は、享楽的な人生を送る妹のピュルシェリ、ヒロインを諭し導く聖人君子的なトランモール、報われない愛に苦しみ自暴自棄に陥る詩人ステニオ、レリアに対する恋情に苦しみ彼女を呪う修道士マニユスの四人である。

なかでも、悪役に位置付けられるマニユスの人物像は目をひく。罪への誘惑

者として異常に女性を嫌悪するところは、ゾラの『ムーレ神父のあやまち』¹⁹⁾に登場する不寛容で執念深いアルシャンジア修道士を思わせるが、逃れられない煩悩を恐れ、苦悩する点が大きな違いであろう。村人たちを「獣同然」と憎み蔑むアルシャンジアに、自身の弱さを省みる精神はない。ピエール・ルブルは、聖職者にふさわしくないマニユスの人物設定のうちに、サンド自身が嫌悪した告解師への不信感をみるが²⁰⁾、神を怖れて苦しみ、精神を錯乱させる姿は読者の憐憫さえ誘う。

崩れおちる廃墟の中からレリアを腕に抱いて救い出したときから、修道士は激しい情念に苛まれてきた。初版、改訂版ともに「マニユス」と題する章があり、レリアとの間に何があったのかといぶかるステニオが、修道士の心の秘密を聞き出す。二人はレリアをめぐって互いに嫉妬しあっている。マニユスによると、レリアはどこへでもやってきて、神に祈りを捧げる自分を誘惑し地獄へ引きずりこもうとする。しかし、それはレリアの姿が頭から離れないマニユスの妄想だった。

神に屈従し大理石の像をぬらすほど涙を流して、わずかながら平安を得られるときもあった。疲労と眠気にぐったりして静かな房に戻ると、レリアが何をするかお分かりか。わしを絶望させ破滅させるために、からかい半分にあの不信心者がどんなことを思いつくかを！あの女は先に部屋に入っていて、巧妙に身をひそめているのだ、祈とう台の敷物の中に、時計の砂の中に、窓際のジャスミンの中に。そしてわしが一日の最後の祈りを始めるやいなや、突然目の前に姿をあらわし、わしの肩に冷たい手を置いてこう言うのだ。「私はここにいますわよ！」。わしは重いまぶたを上げて、乱れた心と再び戦い、あの化け物が消えるまで呪文を唱えなければならんだ。わしの粗末で孤独な寝台に、あれが身を横たえることもあった。おぞましい幽霊め！わしがサージのカーテンを開いて寝床に近づくと、あいつはわしに向かって腕をのばし、わしの恐怖を笑うのだ！²¹⁾

マニユスの恋情は屈折しているが、レリアへの執着はステニオよりも強い。それゆえに神を極度に恐れる修道士は、わが身の救済を妨げる悪魔的存在としてレリアを呪うほかない。「彼女が生きているかぎり、おそろしい誘惑の餌食」なのだ。そして初版では、死んだステニオの亡骸に口づけするレリアの首を嫉妬と欲望のあまりロザリオで絞めるのだ。

一方、レリアは「大理石のような」という形容が多用されるように、感情が欠けた「冷たさ」をもち、対象を持たない熱情に苦しむ二人の男と対比される。

ところが、改訂に際して新たに加えられた第42章では、レリアにも嫉妬の感情が与えられる。姉妹でありながら、正反対の生き方を選んだ妹ピュルシェリに対して抱く嫉妬である。

レリアと合意のうで入れ替わった高級娼婦とステニオは一晚を共に過ごす。翌朝、真実を知った青年は幸せの絶頂から奈落の底に突き落とされるのだが、実はレリアも嫉妬に苦しんでいた。レリアになりすましたピュルシェリに、ステニオが「こんな君は初めてだ。ずっとこのままでいてほしい。本当に君を愛したのはこれが初めてだ。これまでは君の影を追っていたにすぎないのだね。」とささやき、幸福感に酔うのを目の当たりにしたからだ。

身勝手ともいえる嫉妬だが、「大理石のような」ヒロインに血が通った印象を与える。そして、社会も恋愛も見限ったレリアがそのまま生きる気力も失った初版と違い、改訂版のレリアは消そうとしても消えない情熱の使い道を修道院改革に見出す。

女子修道院長となったレリアの部屋へ忍んできたステニオにレリアは胸のうちを明かす。

どんなに固い決意も人間の本質を消すことはできないのです。私は生きることをやめようと決心したので、地上的な欲望には流されません。それでも心は永遠に若さとエネルギーをとどめ、愛する必要と生に対する情熱にあふれているのです。燃料がなくても燃え続けるこの炎が私の身を焦が

すのです。そして、信仰生活において魂が高揚すればするほど、この魂は俗世への未練と必要を新たにします。ステニオ、あなたに言わせると、あまりに冷たく高慢なこの心が、火事のように私を焼き尽くすのです。²²⁾

もてあましてきたエネルギーと才能の使い道を得たレリアは、くすぶっていた情熱に火がついたように精力的に働く。改訂版のレリアからは体温が感じられる。改訂に際して、ヒロインに肉付けされた「嫉妬」は、血潮がたぎる人間性を浮き立たせるための一要素だったと考えられないだろうか。

おわりに

サンドが書いた作品の中には、登場人物の「嫉妬」を人格的な欠点としてのみとらえた『モン・ルヴェッシュ』²³⁾のような小説もある。しかし、少なくとも小論で扱った作品においては、本来、負の要素であるはずの感情が、登場人物の隠れた情熱を示唆するように思われる。

『アンディアナ』では、ラルフがヒロインへの愛情を隠してきたことが明らかになると同時に、それまで感情を消されていた人物像に「嫉妬」の要素が与えられた。そして、無表情な仮面を脱ぎ捨て、誰よりも情熱的で献身的な登場人物へと変身する。

『愛の妖精』のシルヴィネは、弟に過度の愛情を抱くあまり病的な嫉妬に苦しめられた。心身ともに弱り果てた様子に若者らしい生彩はみられない。しかし、バランスを崩していた愛情が対象を発見することによって、主人公は肉体的にも精神的にも急激な成長を遂げる。利己的な「嫉妬」の仮面をかぶっていた情熱が、愛する者のために身を引くという崇高な情熱へ脱皮する。

『レリア』では登場人物たちの嫉妬が糸のようにつながり合う。修道士が抱いた恋情が憎悪にまで変質し、暴走した情念がヒロインを殺害する初版の結末は衝撃的である。修道士の役回りはアンチヒーローだが、レリアの幻影に絶えず

苦悶する姿は、感情を捨て去ることなど出来ない人間の本质を描いている。さらに改訂版は虚無的なヒロインに、嫉妬する一面も併せ持つ情熱を与えた。そして、「大理石」の肉体に血を通わせ、作家が理想とする社会を修道院内に建設しようと力を尽くすのだ。

これらの作品に共通して聞こえてくるのは作家の情熱賛歌である。言葉をかえれば、欠点をも備えた人間性の賛美と言えるだろうか。

註

- 1) 前編はギヨーム・ド・ロリス Guillaume de Lorris によって、1225年から1240年の間に書かれたものと推定される。後編（1275年～1280年）はジャン・ド・マン Jean de Mann による。
- 2) プロスペル・メリメ Prosper MERIMEE, 『カルメン』 *Carmen*, 1845.
- 3) コレット Colette, 『シェリ』 *Chéri*, 1920.
- 4) 日本ジョルジュ・サンド研究会『ジョルジュ・サンドの世界』第三書房 2003年, p. 29.
- 5) George SAND, *Indiana*, Œuvres complètes XVII, Slatkine reprints, 1980, p. 95.
- 6) *Ibid.*, p. 96.
- 7) *Ibid.*, p. 96.
- 8) *Ibid.*, pp. 189-190.
- 9) *Ibid.*, p. 221.
- 10) *Ibid.*, p. 214..
- 11) *Ibid.*, pp. 214-215.
- 12) *Ibid.*, p. 215.
- 13) George SAND, *La Petite Fadette*, Garnier, 1981, p. 32.
- 14) *Ibid.*, pp. 59-60.
- 15) *Ibid.*, p. 223.
- 16) *Valentine*, 1832.
- 17) シャルル・オーギュスタン・サント・ブーヴ, Charles Augustin, SAINTE-BEUVE, 1804-1869, 小説家, 批評家。
- 18) George SAND, *Lélia*, Garnier, 1960, p. 175.
- 19) エミール・ゾラ Emile ZOLA, *La faute de l'Abbé Mouret*, 1875.

- 20) *Lélia*, Garnier, *op. cit.*, p. 85 (note marginale).
- 21) *Ibid.*, p. 85.
- 22) George SAND, *Lélia*, tome II, Editions de l'Aurore, 1987, p. 137.
- 23) George SAND, *Mont-Revêche*, Editions du Rocher, 1989.

(本学非常勤講師)
(2004年2月27日受理)